

平成 30 年度研究開発自己評価書

I 研究開発の内容

1 教育課程

(1) 編成した教育課程の特徴

① コミュニケーション能力、創造的思考力を育成するための新領域「創造表現活動」

これからの社会を考えると、知識や技能の獲得、再生という力だけでは意味をなさない時代が訪れる。そして、個の力だけでなく、価値観や文化の異なる他者との関わり合いの中でその最適解を生み出していくことが求められる。そこには、集団の中で機能する協働的な能力が必要であり、他者との関わりの中で自分の考えを深めたり、広げたりしていかなければならない。つまり、これからの変化の激しい予想が困難な社会に対応して、自分と異なった考えや思いをもつ人とも対話を重ね、主体的によりよい未来を創造していく資質・能力が求められている。そこで、新領域「創造表現活動」（以下、創造表現活動）を教育課程に位置づけ、これからの時代に必要なコミュニケーション能力、創造的思考力を育む。

全学年に領域「創造表現活動」を新設し、年間実施時数は全学年 140 時間とする。第 1 学年では、「国語」、「音楽」、「美術」の一部と、「道徳」、「総合的な学習の時間」を削減する。第 2・第 3 学年では、「国語」の一部と、「道徳」、「総合的な学習の時間」を削減する。

創造表現活動は、相手意識をもったよりよい表現を追求していく「プラム」（以下、プラム）と、自己の生き方・在り方を問い直し、価値の更新につなげる「人間道徳」（以下、人間道徳）で構成する。これら 2 つの小領域の学習を通して、コミュニケーション能力、創造的思考力を育むこととした。

② コミュニケーション能力、創造的思考力を 2 つの小領域の学習を通して育む

育成をめざす 2 つの資質・能力について、本校では以下のように定義した。

- ・コミュニケーション能力 … 他者との対話を円滑に進めて、合意形成する力
- ・創造的思考力 … 自己を見つめ、よりよい社会に向かって価値を更新し続ける力

2 つの資質・能力をどのように育むべきかについては、研究開発 1 年次の取組から見られた課題¹から修正し、育成の視点を設定し、それらを踏まえた学習内容や学習活動を設定し直した（図 1）。生徒たちが特色ある活動に没頭し、自然にかつ意図的に資質・能力の育成を図ることをめざし、2 つの小領域で構成している。

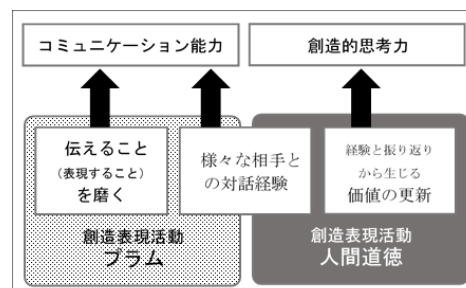


図 1 資質・能力育成の視点と小領域の関係性

③ 創造表現活動プラム

○ 目標

これからの社会を生きる上で必要な内容や、各教科と関連した学習内容を扱い、表現の必然性を備えた学習過程の中で、試行錯誤や成功または失敗経験をしながら、相手意識をもったよりよい表現ができる生徒の育成をめざす。

○ 授業の概要

生徒たちは、単元のゴールに設定されている表現課題（映像制作、紙芝居、シンポジウム、模擬裁判など）に向かって、試行錯誤を繰り返しながらよりよい表現を追求する（図 2）。設定されている表現課題は、学校内に発信するもの、学校外や地域に発信するものなど様々である。各単元は 11 時間を基本とする。単元によっては、専門家から指導や評価を受けながら、「よりよく表現したい」という願いを実現できるように支援を行う。



図 2 プラムの授業の様子

¹ 研究 1 年次は、コミュニケーション能力を育成する領域としてプラムを位置づけていた。今日的な課題を題材として、ペア、グループ、チームの活動を段階的に設定し、話し方や聞き方、話し合い方等を学習内容とした。話し方や聞き方の指導内容や方法を全教職員が共有することに難しさを感じたこと、それにともない、生徒が夢中になって課題解決に取り組むなどの姿が見られなかったことなどが課題となった。

【創造表現活動プラム単元一覧】

学年	期	単元名	
第一学年	前期	ワークショップデザイン体験 ～校内科学体験フェスティバルに向けて～	附高中写真コンテスト ～写真に込められた思い～
	後期	演劇Ⅰ ～幕は上がる～	おすすめ旅行プラン ～香川の魅力を全国へ～
第二学年	前期	演劇Ⅱ	創作紙芝居
	後期	ドラマ附中裁判所 2018 ～感動の昔話法廷～	人の心を動かす映像制作Ⅰ ～映像の可能性～
第三学年	前期	シンポジウム ～ミライノセイトカイ～	瀬戸内アートゲート ～アートゲートをつくろう～
	後期	おもてなし ～四国 88 カ所霊場を世界遺産へ～	人の心を動かす映像制作Ⅱ ～映像に想いを込める～

④ 創造表現活動人間道徳

○ 目標

他者と協働するプロジェクト型の学習を扱い、地域・社会とのつながりを体感できる活動を行う。そして、各授業や単元の節目での振り返りを通して、自己の生き方・在り方を問い直し、価値を更新するとともに、よりよい社会の形成に向けて主体的・協働的に行動できる生徒の育成をめざす。

○ 授業の概要

70 時間の単元構想で、学年団を一つの大きなチームと考え、チーム全体でプロジェクトの成功をめざして活動を進めていく（図3）。プロジェクトの具体的内容については、生徒が主体となって考える。ただ活動を進めるだけではなく、これまでの活動や自分自身、これからの在り方などをじっくりと見つめ直す時間が設定されている（図4）。教師が設定することは、1年間を通して生徒たちに考えてもらいたいこと（問い直してもらいたいこと）である²。生徒たちは、プロジェクトを進めていく過程で出合う様々な体験や振り返り等を通して、今まで気づけなかった価値に気づいたり、ヒト・モノ・コトへの見方や考え方を多面的・多角的に捉え直したりすることができるようになる。



図3 人間道徳の授業の様子



図4 振り返る時間で想いを語る生徒

【創造表現活動人間道徳単元一覧】

学年	重点を置く価値	単元名	単元の概要
第一学年	自己理解 協力 勤労・地域貢献	食べるラボプロジェクト	単元のゴールには、高松駅周辺公共施設にて自分たちの1年間の学びの成果を一般公開する。食に係るプロジェクトで、自分たちで野菜、米を育て、収穫し、地域の人たちにふるまうとともに、食に関する学びも発信する。8月にプレ実施を行う。
第二学年	相互理解 個性の伸長 よりよく生きる喜び	ドリー夢メーカープロジェクト ～ともに夢を描こう～	どんな自分になりたいのか、社会の中で生きるはどういうことか、福祉施設訪問や職場体験をもとに自分なりの考えを見つけていく。小学生との交流活動を単元のゴールとし、体験を通して得られた自分なりの考えを踏まえ、小学生に向けて「働くことの意義」を発信する。
第三学年	個性 他者理解 社会参画	絆プロジェクト ～自分、相手、そして 社会を楽しくするために～	高松市の観光地玉藻公園内で、地域の人たちや観光客に楽しんでもらえるイベント「遊び処附属亭」を開催するプロジェクトを実施する。このプロジェクトを通して、これからの社会を創るために、自分はどう生きるべきか、どう在るべきかを考えていく。

(2) 教育課程の内容は適切であったか

次に示すものは、各単元で教師が見取った生徒の姿及び教員座談会記録、アンケート調査（生徒対象、教員対象）から考察したことである。

① 社会からの要請、生徒の発達段階、能力・適正の視点から

コミュニケーション能力、創造的思考力は、これからの社会を考えると必要不可欠な資質・能力であり、より

² 本校ではこれを「重点を置く価値」と設定している。

よい社会を創るために求められる資質・能力であるといえる。これらの資質・能力を中学校教育で意識的に育成を図ることは極めて重要であると考える。

一方で、これらの資質・能力を学校現場で意識的に育成を図ることに対して問題もある。それは教育課程のどこに位置づけるかによって、本来育まれるべき資質・能力が十分に育まれない可能性がある。例えば、各教科の学習で、コミュニケーション能力、創造的思考力を意識的に育むカリキュラムになると、各教科の学習で目的（教科で育成すべき資質・能力を育むこと）と手段（話し合うこと等の言語活動）が曖昧になる恐れがある。

これからの社会で求められる資質・能力を踏まえ、それらを育むための新領域設立は適切であると考える。

② 生徒の興味・関心の視点から

【創造表現活動プラム】

生徒が「表現したい」と感じることができるような題材やゴールを単元設定の条件としているため、常に生徒の興味・関心を踏まえた単元構想を意識している。教師が単元を設定するが、その過程は、生徒個々の願いや工夫が反映できるように、ある程度の自由度をもたせていることもあり、主体的に取り組み、単元のゴールに向けて試行錯誤する姿が何度も見られたことから、適切であったと考える。

しかし、言い換えるとどのような題材を扱うかが、プラムにおいて重要なカギを握るともいえる。実際に、生徒自身が「楽しい」と感じる単元と、そうでない単元があった。

【創造表現活動人間道徳】

生徒が主体となって、企画したり、計画を立てたり、実際に地域の人たちと自ら交流を図ったりするため、やりがいを感じている生徒も多い。積極的に学校外に出て活動を行うことも、生徒の学習意欲を高めている要因になっている。生徒と教師が一緒になって考えたり、アイデアを出し合ったりすることもあることから、従来の学校生活では味わうことができない様々な実感や気づきを得ることにつながっている。

③ 新領域と教科学習の関連の視点から

新領域と教科学習を無理に関連付けることは、各々の教育活動のねらいを阻害する要因になると考えた。本研究開発では、コミュニケーション能力、創造的思考力を育むための創造表現活動を設立したことから、これらの資質・能力を教科学習の中で意識的に育むことはめざしていない。このことが、各教科の本質とは何かを教師自身が問い直すきっかけとなった。その結果、教科学習では、各教科の本質に迫る学習を行うことに重点を置き、教科で育成すべき資質・能力に焦点をあてて学習指導を行うことができるようになった。

(3) 授業時間等についての工夫

創造表現活動は、年間 140 時間で構成される。プラム 70 時間、人間道徳 70 時間を基本としている。プラムの単元は 11 時間構想を基本とし、その中に試行錯誤場面を意図的に設定している。活動内容に応じて弾力的にまとめ取りすることも可能とし、生徒の表現意欲を維持向上する手立てにつなげている。人間道徳の単元は、70 時間の単元構想である。積極的に学校外での体験を行うことができるようにするために、このような単元構想にしている。このことにより、生徒たちはじっくりと目の前の活動に向き合ったり、自分自身を振り返ったりすることができるようになった。そして、学校内ではなかなか経験することができない様々な出会いを保障することができた。

2 指導方法・教材等

(1) 実施した指導方法等の特徴

① 創造表現活動プラム

○ 生徒がめざすゴール「表現課題」の設定

生徒は各単元で設定された表現課題を追求する。表現課題を設定するにあたり、表現への意欲を高めるために、実生活や実社会において必要と感じる課題を設定したり、人間道徳や各教科における表現とのつながりや、学校外の取組とのつながりをもたせたりするなど、各単元の特性に応じて工夫を行う。さらに、表現課題に対して、自分なりの考えや意図、アプローチの仕方等が多様になるようにし、主体的・協働的に学習に取り組むことができるようにする。また、学年が上がるにつれて、表現する相手が「学校内の相手」から「学校外の人や社会等」へ広がりが生まれたり、課題設定が「教師が決めたテーマ」から「自分で決めたテーマ」へと自由度をもたせたりするなどしている。

○ 試行錯誤場面を意図的に設定した単元構成

よりよい表現を追求していく過程において、表現の試行錯誤が必然的に生じるようなしかけを行う。つま

り、失敗を許容し、練り直しの過程を意図的に単元内に位置づける。例えば、伝えたい相手にうまく伝わらない経験や思っている通りに伝えたいという感情が生まれるように、プレ表現場面や他者からの評価場面を単元の節目で意図的に設定する。時には、その道の専門家による評価や専門的な指導を取り入れ、よりよい表現になるために必要な知識や技能、またはゴールへの道筋を学ぶことができるようにする。

試行錯誤場面では、自分たちで考え、やってみて、練り直し再度やってみる、その過程で何が足りないのか、どうすればよいのかを自分たちで考え、創り上げていくところにプラムの意義がある。その場面で自ら意見を述べたり、他者の意見とすり合わせたり、意見をまとめたりする対話経験は、コミュニケーション能力を高める要素にもなる。

② 創造表現活動人間道徳

○ 自己の問い直し

単元の中に自分をじっくりと見つめ直す時間を位置づける。様々な活動を経験するだけでなく、その活動で自分は「何を感じたのか。」「何を考えるべきだったのか。」「どのように行動すべきだったのか。」等を深く振り返る場面を、各授業や単元の節目で行うことができるように設定する。体験・経験そのものがヒト・モノ・コトへの見方や考え方が変わるきっかけとなったり、自分とは異なる考え方や価値観に触れることで、自分自身の生き方・在り方を考えるきっかけとなったりして、生徒一人一人の価値の更新につなげている。

○ 地域・社会とのつながり

学校外の他者、社会とのつながりを生徒自身が体感する場面を意識的に取り入れ、学校外の他者との対話を通して、実社会の有り様を感じ取ることができるようにする。各学年で設定されているプロジェクトは、普段の生活ではなかなか触れることができない地域・社会とのつながりを体感することができる活動としている。実際に学校外の人たちとの対話が行われることで、いろいろな生き方・在り方を感じ取ることができる。

○ 目標の共有・協働—生徒主体のチーム活動—

人間道徳では、プロジェクトの成功に向けて生徒自ら企画したり、計画を立てたり、練り直したりできるようにしている。そのため単元計画を修正しながら学習を進めることも多い。また、学年団という大きなチームで学習に取り組むため、目標の共有が必要になる。時には学年団全体で、また小チームで、自分たちのすべきことを話し合ったり、何のために行うのかを見つめ直したりする機会を設けながら、1つの方向性に向かうことができるようにしている。

(2) 指導方法等は適切であったか

① 創造表現活動プラム

実践事例 第3学年プラム「人の心を動かす映像制作Ⅱ～映像に想いを込める～」※平成29年度実施単元

【表現課題】

今年の文化祭で「人の心を動かす映像コンテスト 2017」が開催されます。文化祭に参加した人たちの心を動かす映像作品をつくりましょう。2分以内のショートムービーで附中生、卒業生、家族の心を動かしましょう。映像作品を見た視聴者が、「伝えたい想い」が分かるような映像作品にしてください。

【単元の流れ】

回	1	2・3	4～7	8	9・10	11
活動の流れ	オリエンテーション	企画会議	撮影・編集	中間上映会	練り直し	映像コンテスト(予選)
備考	・専門家から映像制作のポイント指導	・個人で考えた企画をチーム内でプレゼンした後、チーム作品の方向性や脚本の詳細を考える。	・撮影はタブレットで行い、撮影後すぐに確認、修正できるようにする。 ・チーム内で役割を決め、各視点で修正案を考えることができるようにする。	・現段階の作品を他チームや専門家から評価してもらい、自分たちの伝えたいことが伝わっているかを確認する。 ・他者からの評価をもとに、修正案を考え、今後の撮影・編集計画を立てる。	・他チームからの評価を踏まえ、自分たちの伝えたいことを再度共有し、作品の修正(追撮・編集)を行う。	・他チームからの評価を踏まえ、自分たちの伝えたいことを再度共有し、作品の修正(追撮・編集)を行う。

【単元でめざした生徒の姿】

- ・自分たちの想いが伝わる映像作品にするために、自分の意見を積極的に述べたり、チーム内の意見をまとめたりすることができる。
- ・自分たちの想いが伝わる映像作品にするためには、伝えたい相手の気持ちを踏まえた内容を構成することと、登場人物の表情やしぐさ、カメラアングル、音等の伝え方の工夫が大切であることに気づくことができる。

【実践の考察】

ア 活動に取り組む生徒の実際

映像制作という題材は、生徒にとって興味・関心が高く、意欲的に活動に取り組む姿が単元前半から多く見られた。映像制作に関する専門的な指導を教師が十分に行えないという部分を専門家との連携によってカバーし、チーム作品のゴールイメージに近づいていく実感が味わえたことも関係していると考えられる。実践前後のアンケート結果（図5）から次のような成果があげられる。

- 普段の授業では、自分の意見を言うことに苦手意識を感じていた生徒が、本単元の話合い場面で、自分の意見を自分から言うことができたことと認識する生徒が増えたことが分かる。
- 話し合い場面で、これまで意見をまとめる立場にならなかった生徒が、本単元の活動の中では、意見のまとめ役になって活動を進めることができたことと認識する生徒が増えたことが分かる。

イ 表現の要素や考え方の獲得と映像作品の変容

専門家による具体的な技術指導、教師による伝えたい相手と伝えたい想いの意識付け、そして、自分たちの作品や他チームの作品の視聴機会及び評価機会の設定により、生徒たちはよりよい映像作品を作るために必要な視点や考え方を身に付けていくことができた。映像制作途中のワークシートからもそのことが伺える（図6）。つまり、本単元で設定している表現の要素を、自分たちの力で身に付けていくことができたと考えられる。このことにより、試行錯誤を繰り返しながら作成した映像作品は、回を重ねるにつれて、よりよいもの（伝えたい相手に伝えたい想いが伝わる映像作品）へと変わっていった。特に、中間上映会での視聴者の素直な意見と専門家による評価（図7）は、自分たちの作品を見直すきっかけとなるだけでなく、さらなるこだわりを生むことにもつながったと考えられる。

【本単元の課題】

▲ 生徒の課題意識と専門家の指導内容とのズレ

本単元では、専門家と連携して指導を行ったが、50分の授業の中で、専門家が指導したことと生徒の課題意識にズレが生じており、生徒の活動意欲の減退につながった場面があった。原因は、教師が指導してほしいことを、専門家に十分に伝えることができなかったことだと考えた。

→ 平成30年度の実践では、全体への指導内容を減らし、各チームが必要だと感じていることを教師が見取り、専門家に伝え、個別に支援を行うようにした。

▲ 単元後半における活動意欲のバラつき

ある程度作品が完成してくると、活動意欲が停滞する生徒もいた。そこには、ゴールとして設定している課題に対して、自分なりの想いを込めることがあまりできなかったのではないかと考える。活動意欲のカギは生徒がどれだけ「いい作品にして、視聴者の心を動かしたい！」「自分たちの想いを伝えたい！」と思うことができるかだと考えた。

→ 平成30年度の実践では、第3学年後期単元に設定し、表現課題は『卒業式前日に自分たちの想いを伝える卒業上映会を開催し、そのための映像作品をつくる』とした。

②創造表現活動人間道徳

実践事例 第3学年人間道徳「絆プロジェクト～自分、相手、そして社会を楽しくするために～」 ※平成30年度実施単元

【本単元のプロジェクト内容】

「遊び処 附属亭」というイベントを企画、運営し、自分も相手も社会も楽しくする。「遊び処 附属亭」は玉藻公園内披雲閣で開催し、一般の訪問客を対象に自分たちで企画したイベントを楽しんでもらう。

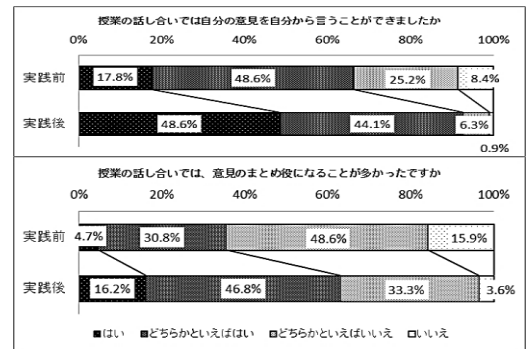


図5 実践前後のアンケート結果 (N=119)

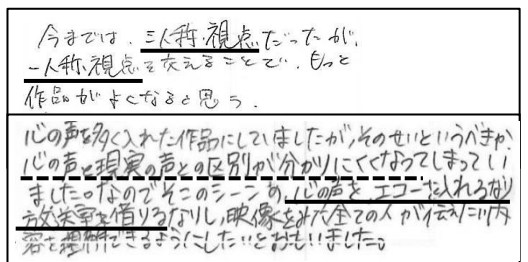


図6 想いを伝えるための工夫（生徒記述）

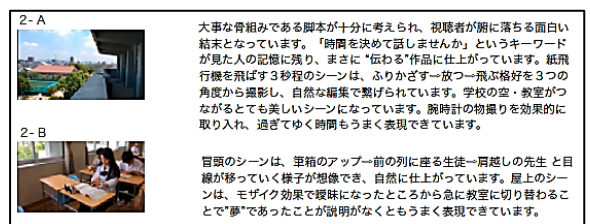


図7 専門家からの作品評価

【本単元の流れ】

	企画 → 現地調査 → 準備 → 校内プロモ → 準備 → 附属亭1回目 → 修正 → 附属亭2回目
	振り返り 振り返り 振り返り 振り返り
活動	   

【本単元でめざした生徒の姿】

- ・ 自分、相手、社会に楽しさを提供する企画を主体的に創り上げ、仲間と協働的に取り組むことができる。
- ・ プロジェクトを通して、人を楽しませることの喜びと難しさについて気づき、よりよい社会を創るために、これからの自分に何ができるか考えることができる。

【実践の考察】

ア 活動に取り組む生徒の姿の実際

本単元を実践するにあたり、生徒の主体性や創造性を引き出すべく、活動の多くを生徒に任せるようにした。これは昨年度の生徒の振り返りから「もう少し自分たちで考えてプロジェクトを進めたい。」という内容があったことから改善した点である。前年度の3年生の活動を見てきた現3年生は、ゴールイメージをある程度もっており、そのプロジェクトで得られる実感もおおよそ想像がついている。そのため、「自分たちも先輩みたいにしたい！先輩以上のプロジェクトにしたい！」という願いをもっていため、単元の進め方を修正した。

結果、教師の想像をはるかに超える生徒の姿が多く見られた。自分から積極的にアイデアを出す生徒、話し合いを一生懸命まとめようとする生徒、改善点はほかにないのか必死で考えている生徒、全生徒に対して自分の想いをぶつけている生徒などである。70時間というゆとりある活動時間と、何度も自分たちの見つめ直す時間を保障したことも、このような生徒の姿につながったのではないかと考える。

イ 新たな価値への気づき

第3学年の生徒が、これまでの人間道徳を振り返り、次のような記述がワークシートから見られた。

<p><生徒A> 「誰かのためになること」をすることはすごく難しいことだと思った。1年生の時、熊本地震の活動でコアメンバーとなり、頑張った。正直人間道徳の時間が嫌いになった。自分が思ったことをみんなに伝えるが全然伝わらない。仕方ないことだと思っていたけど、めんどくさくなってしまった。香川県だから仕方ないと自分に言い聞かせてしまい、やる気がなくなってしまった。でも自分が少し変わったような感じがした。良い方向に進めたのか悪い方向に進んでしまったのかわからないが、ネガティブ思考になってしまった。</p> <p>2年生のとき、福祉体験、職場体験を通して自分を再び見直した。少しずつネガティブ思考からポジティブ思考になった。未来の私自身の想像図を何個も何個も作り出し、この想像図はここがいいけど、ここが悪いとしっかり考えた。この想像になりたいと思うことはなかったけど活動をする前より、確実に未来を考えられるようになった。</p> <p>そして3年生、自分、相手、そして社会を楽しくするために、みんなと話し合いをした。ランツで発表することは1年生のときの恐怖があり、することができなかつたが、<u>班などで話すときは自分の意見を発表することができるようになった。</u>言い合いになってしまうこともあった。<u>形に見えるものと形に見えないものの違いをすごく感じた。</u>人間道徳で学んだことは、将来必ず役に立つことだと思う。<u>自分の将来、人と関わることの必要性を考えさせられるものとなった。</u>学生にしかなできないことをやることができた。もう一度やれるのであればやりたいと思う。これから、人と関わり合って、しっかりと自分というものに気持ちを向け、何事にも挑戦していきたい</p> <p><生徒B> 私はプロジェクトを通して、<u>人とのかかわりが少し理解できたように感じます。</u>活動の中で、<u>だれかのために行動し、だれかが喜んだり、感謝されたりした時、私も活動してよかった</u>と思いました。そんなかかわりが「絆」と言えるものなのかはわからないけれど、良いものであるとわかりました。</p> <p>今の私について考えてみると、私があることに意味があるのかわからなくなります。私は勉強も運動もできなければ人と関わるのも苦手で、いてもいなくても同じだと言われても仕方ありません。しかし、<u>だれかのためになる活動を続けることができれば、こんな私にも価値が出てくるのではないかと考えます。</u>誰かのためになることは簡単ではないということも、この3年間で学びました。しかし、<u>それをやってみたい</u>という思いはありますし、私の場合、<u>努力しても大して変わらない勉強や運動よりも価値があり、大切なことだろうと感じます。</u></p> <p>私はこの3年間で、自分の生き方を見つけ、誰かのために行動しようとする意思をもつことができたと思います。</p>

II 実施の効果

1 生徒への効果

本研究の成果と課題を明らかにするために、資質・能力に関するアンケート調査結果（表1）と、創造表現活動で見られた生徒の実際の姿やそれを見取った教師の記述等をもとに検証する。

表1 資質・能力に関するアンケート調査結果

※数値は肯定的回答率%（「はい」「どちらかといえばはい」と答えた生徒）

類	質 問	現高校1年生		現中学3年生		
		2年時 H28.10	3年時 H29.10	1年時 H28.10	2年時 H29.10	3年時 H30.10
コミュニケーション能力に関する項目	班や学級での活動で、みんなの意見をまとめようとしている。	52.2%	72.3%	55.1%	58.5%	60.5%
	友達の前で自分の考えや意見を発表することは得意である。	50.4%	56.3%	40.7%	44.1%	43.7%
	発信をするときは、相手の気持ちを考えて意見を伝えようとしている。	84.3%	92.0%	92.4%	91.5%	89.1%
	質問をするときは、質問内容を考えて適切な質問をしようとしている。	88.7%	92.0%	94.9%	91.5%	89.1%
	授業で意見などを発表するとき、うまく伝わるように話の組み立てを工夫している。	65.2%	82.9%	74.6%	78.8%	82.4%
	自分の考えを他の人に伝えるとき、表情や態度に気をつけている。	78.3%	87.5%	89.0%	81.4%	85.7%
	自分と違う意見をよく聞き、良いものを取り入れようとしている。	83.5%	92.9%	89.8%	96.6%	94.1%
	現時点での自分の伝え方で、自分の考えは相手に正しく伝わっていると思う。	65.2%	77.5%	60.2%	71.2%	63.9%
	学級の友達との間、生徒の間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができている。	77.4%	92.0%	83.1%	91.5%	89.9%
	発言する人の気持ちを考えながら、話を聞こうとしている。	77.4%	89.3%	89.0%	91.5%	92.4%
現時点での自分のコミュニケーション能力は将来の仕事や夢にプラスに働く。	69.6%	81.3%	78.8%	77.1%	74.8%	
創造的思考力に関する項目	自分には長所がある。	53.9%	67.0%	67.8%	70.3%	69.7%
	地域や社会をよくするために何をすべきか考えることができる。	49.6%	60.7%	61.9%	51.7%	43.7%
	私の参加により、地域や社会を少し変えられるかもしれないと思う。	51.3%	58.9%	46.6%	44.1%	45.4%
	自分自身についてじっくり見直そうとしている。	70.4%	82.1%	78.8%	78.0%	74.8%
	見方や考え方の違う人と接することは、見方や考え方を深めることにつながると思う。	87.8%	93.8%	89.0%	94.9%	91.6%
	課題を解決しても、新たな課題や疑問がないかと考えようとしている。	59.1%	71.4%	61.9%	67.8%	66.4%
新しいことを始めても、出だしでつまずくとあきらめてしまう。	43.5%	56.3%	38.1%	39.0%	46.2%	

※アンケートの回答は「はい」「どちらかといえばはい」「どちらかといえばいいえ」「いいえ」の4段階評価で行った。

(1) コミュニケーション能力

① アンケート調査結果と創造表現活動の生徒の実際の視点から

本校では、コミュニケーション能力を「他者との対話を円滑に進め、合意形成する力」と定義し、次のような姿をコミュニケーション能力が高まった姿と設定し、創造表現活動の学習の中で見られることをめざした。

- 自分の想いを、様々な方法を使って伝えることができる生徒
- 自分の想いを、相手意識をもって伝えることができる生徒
- 状況に応じて合意形成することができる生徒

表1のアンケート調査結果から、「班や学級での活動で、みんなの意見をまとめようとしている。」の項目について、肯定的回答をした生徒が増加した。創造表現活動では、すべての単元で小グループやチーム等の複数人数での活動が行われている。よりよい表現に向けて、自分たちでグループ内の意見をまとめたり、課題解決をおこなったりする機会が数多く保障されており、なおかつ目の前の活動に楽しさを感じながら取り組んでいることが要因ではないかと考えられる。このことは、教員座談会の記録及び公開授業参観者の意見からも分かる（図8）。

また、「発信をするときは、相手の気持ちを考えて意見を伝えようとしている。」「質問をするときは、質問内容を考えて適切な質問をしようとしている。」「授業で意見などを発表するとき、うまく伝わるように話の組み立て

【教員座談会記録より】

・プラムでは、取り組むべき表現課題や題材、人間道徳では取り組むプロジェクトが成功した時のビジョンが描けるかどうかが大切だと思う。
・自分から進んで話し合いに取り組んでいる授業が多くなったと感じる。生徒が楽しそうに取り組んでいる姿が印象的だ。

【公開授業参会者の意見】

・ほとんどの生徒が、夢中になって取り組んでいることに驚いた。教科学習にはない、魅力が創造表現活動にはあると感じた。

図8 教員座談会記録、参会者記録

・今回セリフを考える上で、裁判において弁護士側と検察官側の視点は真逆で矛盾していることがあり、ストーリー性を保つのが大変でした。相手の意見の反論に自分の意見の強調をくっつけることが大切だと思いました。

・今回は作ってくれた脚本に添削などをして1回通してみました。全体を見ていて、やっぱり弁護士側がとて弱いな、と感じました。これから、異議や新しい証拠を作ってみんなが悩むような作品にしたいです。

図9 振り返りワークシートの記述

・たくさんの方の考え方を自分と関わり合って自分の意見を発信し、また相手の意見を受け取る。このような話し合いが日常でも行われると一人一人の考えが深くなっていくと思うのでこれからも心がけたいです。

図10 振り返りワークシートの記述

【10月26日公開授業記録にて】

・円滑に進めるとなると、スマートに進めることとなるが、実際は泥臭く粘り強く進める力が身についていると感じた。伝えると内容や構成を研究しているからこそ、相手の内面を感じたり、感受性を学ばせたりしているほうが、強いのではないかと感じた。

・最初は、相手意識というのが前面ではなかったが、最近ではそのような力が身につけてきたのだと思った。伝えるということに焦点を当てたからこそ、相手意識や相手のメタ認知等も気にするようになってきたのであろうと感じた。

図11 運営指導委員、公開授業参会者の評価

を工夫している。」の項目について、肯定的回答を示す生徒が多い。このことは、プラムの学習で、自分たちの想いを伝えるためには、伝えたい「内容を構成する」ことが大切であることに気づかせることをめざして行ってきたことが要因ではないかと考えられる。生徒の振り返りワークシートからも、「内容を構成する」大切さに気付いていることが分かる(図9)。

また、「自分と違う意見をよく聞き、良いものを取り入れようとしている。」「学級の友達との間、生徒の間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができている。」「発言する人の気持ちを考えながら、話を聞こうとしている。」の項目について、肯定的に回答した生徒が増加した(または高い回答率を維持している)。これらの項目は、話を聞くことに関わる内容である。聞くことについては、創造表現活動で重点をおいて取り組んだことではないが、プラムで伝えることに焦点をあてていたことが影響したのではと考える。実はそれによって相手の気持ちを理解しようとし、伝えたい内容や伝え方を考えたり、話し合いを円滑に進めていくためには、相手の意見を自分なりに受け入れたりすることが重要であることに生徒自身が気づいたと考える。生徒のワークシートや教師の授業記録からもこのことが分かる(図10)。

② 外部評価の視点から

運営指導委員からの評価や、公開授業に参会された先生方からの評価からも、コミュニケーション能力に関する効果が分かる(図11)。

③ 課題

表1から、予想に反して成果が表れなかった項目は「友達の前で自分の考えや意見を発表することは得意である。」である。コミュニケーション能力の高まりを肯定的に自己評価しながらも、得意であると認識するまでには至らなかった。得意と認識するためには、発表することを他者に称賛されたり、認められたりする経験や実感が必要である。また、「現時点での自分の伝え方で、自分の考えは相手に正しく伝わっていると思う。」の項目については、現高校1年生には成果が見られたが、現中学3年生には成果が見られなかった。この原因については、今後生徒へのインタビュー調査をもとに検証したい。

(2) 創造的思考力

本校では、創造的思考力を「自己を見つめ、よりよい社会に向かって価値を更新し続ける力」と定義し、次のような姿を創造的思考力が高まった姿として設定し、創造表現活動の学習の中で見られることをめざした。

- 新たな価値に気づくことができる生徒
- 今までとは異なる見方や考え方で、自分とヒト・モノ・コトとの関わりを捉えることができる生徒
- よりよい社会を創造するための新たなアイデアを生み出すことができる生徒

① アンケート調査結果と創造表現活動の生徒の実際の視点から

表1のアンケート調査結果からは、「見方や考え方の違う人と接することは、見方や考え方を深めることにつながると思う。」という項目についてのみ、成果が見られた。このことは、人間道徳の学習の中で、学校内の仲間のみならず、多くの人たちと関わり合いながら、プロジェクトの成功に向けて課題解決を行ってきたことが要因だと考えられる。生徒のワークシート記述からもこのことが分かる(図12)。

アンケート調査結果には表れなかったが、教師の見取りとから、学習でめざした生徒の姿が多く見られた。例えば、生徒Aは1年時の人間道徳で「震災の被害をうけた人たちに自分たちができることは何か」とみん

などで考えた時、「このこと自体に、何の意味があるか分からない。」と発言した。しかし、3年時の人間道徳で、「僕のしたことによって、周りの人たちが幸せに感じる事が、僕の幸せだ。」と発言した。生徒Aは、今までとは異なる見方や考え方で、自分とヒト・モノ・コトとの関わりを捉えることができるようになり、3年時の人間道徳では、地域の人たちを楽しませるために、様々なアイデアを生み出していた。

② 外部評価の視点から

運営指導委員からの評価からも、創造的思考力に関する効果が分かる(図13)。

③ 課題

「地域や社会をよくするために何をすべきか考えることがある。」
 「私の参加により、地域や社会を少し変えられるかもしれないと思う。」の項目については、思うような成果は得られなかった。人間道徳では、地域や社会とのつながりを実感できるような体験を数多く保障したり、実際に地域や社会に向けて発信する機会があったりしたにも関わらず、肯定的回答率に高まりは見られなかった。

(省略)…1番印象に残っているのは福祉体験の時で、「この活動は意味ないのではないか。茶番ではないのか」というのがあって、その時は自分でもよくわからなかったが、時間がたってまた考えてみると「じゃあそこで働く人は意味ないのか?いや、そうではないな」と思い、その私の答えは「この活動には、だれかのためとはずっとその人のためになるわけではないけれど、だれかを笑顔にすることに意味があると思う。」ということになった。こうして1つ1つの活動で体験や振り返りを通してじっくり考え、言葉にすることで新たな考えや価値観を持つことができた。

図12 振り返りワークシート記述

・アイデンティティ形成の場になっている。他の人と違って自分はどうかだろうかや、過去、現在、未来とつながって自分ってこういうものなのかなという事などをアイデンティティといたりする。明確にいえる人はいないが、こういうものかなというものを持っている。そういうのを形成するのが青年期だといわれている。…中略…
 プラムや人間道徳で社会と触れる機会が、自己を多角的に見る機会を意図的に作っているのが創造表現活動ではあると感じた。その中で自分と他者の違いを気づく場が豊富にある。過去、現在、未来の自分と向き合う場になっている。

図13 運営指導委員からの評価

2 教師への効果

表2は、教師アンケートの結果(平成28年度～平成30年度:N=20)である。アンケート調査結果を見ても分かるように多くの教師がこのカリキュラムに手ごたえを感じている。ここには、教員間で何度も創造表現活動の目標や内容、方法を議論し、めざす具体的な生徒の姿を共有できたことが大きいと感じる。「研究開発の取組が自分自身にどのような効果をもたらしたか」について記述した内容の一部である。記述内容からも、研究開発の取組が、各教師の教師観や指導観に影響を与えたことが分かる。

※〇年目は本校在籍年数

(1年目教員)	教科の枠にとらわれることなく、授業を考えることができるようになった。また、人間道徳については、本当に生徒の課題意識をもとに道徳教育が行われていると思う。
(1年目教員)	今までは、教科のみの資質・能力だけを考えることがほとんどだった。そのため、これからの生徒に必要な力を再確認したり、自分自身で吟味したりする機会となり、教育について考えを深めることができた。教科についても再認識することにより、授業内容やスタイルも変わってきたと思う。
(2年目教員)	1年目は理解できなかったことが多かったし、生徒の変化もつかめなかったため、よさは分かりにくかった。しかし、3年生の人間道徳を終え、本当の意味でしんどさや意見の衝突、やりきった達成感を生徒一人一人が感じていたし、1、2年で(生徒の)成長を判断してはいけなかった。教科の授業を削減されて困ることも多いが、授業の内容をよりシンプルに考えることは多くなった。
(5年目教員)	学年団で活動するため団の先生方とよく、話をするようになった。そのことで、教科学習だけでは感じ取ることのできない生徒の変化などにも目を向けられるようになった気がする。
(10年目教員)	コミュニケーションとは何か?道徳とは何かについて様々な考え方に触れる機会が増えた。中学校は教科の特性があるため、教育課程について考える場合、全体で生徒の学びを補償するという視点を失いがちになることがあると分かった。(自教科の枠組みを守りすぎるときがある)

表2 教師アンケート調査結果(N=20)

※数値は肯定的回答率% (「はい」「どちらかといえばはい」と答えた教師)

No.	質問項目	2年次 H28.11	3年次 H29.11	4年次 H29.12
1	教員間の連携が強くなった	88.2%	93.8%	100.0%
3	自分の教科以外の学習について話をするようになった。	88.2%	88.2%	100.0%
4	自分の教科を指導する際に、指導方法について工夫するようになった。	93.8%	94.1%	100.0%
5	自分の教科の中で、生徒の話し合いが活発に行われるようになった。	87.5%	82.4%	88.9%
6	他者の意見を取り入れようとする生徒が増えた。	70.6%	75.0%	88.9%
7	生徒間の対話に変化がみられることがある。	60.0%	88.2%	88.9%
8	人間道徳は、従来の道徳の時間よりも、生徒にとって価値のあるものだと思う。	82.4%	94.1%	100.0%
9	自教科でも「振り返り」を意識するようになった。	87.5%	82.4%	88.9%
10	教育課程のことを考えるようになった。	81.3%	82.4%	100.0%
11	従来の教育課程よりも、創造表現活動を設置した教育課程の方が生徒にとって良い。	87.5%	93.8%	94.1%

3 保護者への効果

表3は、保護者アンケートの結果（平成30年度：N=273）である。アンケート結果からも、本校の取組に理解を示していることが分かる。また、実際に子どもの成長を感じ取ったり、創造表現活動への期待をもったりしていることが、自由記述からも分かる（図14）。何より、家庭での子どもとの会話が増えたと感じている保護者が多い。一方で、教科の授業時数が削減されていることへ不安を抱いている保護者もいる。

表3 保護者アンケート（H30.11実施）

No.	質問項目	そう思う	思う いえはそう	どちらかと いえはそう 思わない	どちらかと いえはそう 思う	い そう 思わな
1	コミュニケーション能力を学校の授業で育成することは大切である	87.5%	11.7%	0.7%	0.0%	
2	創造的思考力を学校の授業で育成することは大切である。	81.3%	18.0%	0.7%	0.0%	
3	ブラムで相手意識をもったよりよい表現を追求する学習を行うことが必要である。	70.2%	27.8%	1.6%	0.4%	
4	人間道徳で、様々な体験や活動等を通して自分の生き方・在り方を考えることは必要である。	82.5%	16.4%	1.1%	0.0%	
5	創造表現活動の学習時間は年間140時間（週4時間）程度設定しています。この授業数は適切である	33.7%	45.9%	18.5%	1.9%	
6	創造表現活動の学習は、子供のこれからの生活や将来の職業に役立つ	64.1%	32.2%	3.3%	0.4%	

「創造表現活動の学習を通して、お子様にどのような変化がありましたか」
 ○子どもはとても楽しんでます。興味をもち積極的に取り組んでいます。家でもこの授業のことを話してくれます。
 ○表現力が高まったり、いろいろな年齢の人と物おじせず話せたりするようになってきたと思います。
 ○自分から調べ、協力者を探し、創り上げる主体的な時間が増え、忙しいと言いつつも、いきいきと活動するようになったと思います。
 ○地域のことに興味をもつことによって、親子の会話も増えました。
 ○自分の意見を伝えることが、以前と比べてできるようになったと思います。
 ○自分がどうなりたいか考える良い機会だと思う。
 ○変容は特にありませんが、親子の会話が増えたと思います。学校での話を中学生になるとあまり言わなくなりました。活動に必要なことを相談するという内容ではありますが、親子の会話時間が増えたり、家族との会話が増えたりしてよかったです。
 ○創造表現活動の学習による変化ではないかもしれませんが、様々な経験をさせていただくことで、特に精神面での成長をとっても感じます。反抗期真っ只中で、私に対し、悪態をつくのは日常茶飯事です、『ありがとう』と言えることもだんだん増えていきます。自分の将来とか、自分のことについて考えたりとかとてもいい影響を受けています。先生方のおかげで、思春期のこの難しい時期の子どもがよい方に成長していると日々感謝しています。
 ▲創造表現活動も大切な授業の一貫と思いますが、費やす時間数が長いのでは、と思います。もう少し五教科の方に力を入れてもらいたいです。
 ▲大切ではあるが、通常の授業に影響が出ない程度での時間バランスを考えて欲しい。

図14 保護者アンケート調査（自由記述）

Ⅲ 研究実施上の問題点と今後の課題

1 研究実施上の問題点

(1) コミュニケーション能力、創造的思考力の捉えと評価の難しさ

本研究開発で焦点をあてた2つの資質・能力は、先行研究をみても定義が様々である。社会的要請として求められるこれらの資質・能力の捉えを学校全体で共有することに難しさがあった。また、それらの資質・能力の高まりを見取ることについても同様であった。本校では、教員が求める生徒の具体的な姿を設定し、そのような姿が見られるように教育課程を開発した。

(2) 授業づくり・授業改善の視点の共有の難しさ

新領域の授業づくり・授業改善には、学校全体の共通理解が欠かせないが、それを実現することが難しかった。本校では、新領域の目的、目標、内容、方法を何度も見直し、修正し、研究授業を繰り返しながら、共通理解を図った³。

2 今後の課題—本研究開発の発展に向けて—

① 特別の教科道徳のその先へ

道徳が特別の教科となり、多くの現場で試行錯誤しながら実践されている。教科化に対する成果もあるが、当然課題もある。本校の人間道徳では、生徒自身が体験したことそのものが教材となり、自己を見つめ、自己の生き方・在り方を問い直す。そこでの気づきを、さらに次の活動（体験）につなげている。それは大きな学習の流れ（大単元構想）の中で自然に行われるため、気づきと態度がつながっていった。

② 中学校で育成すべき資質・能力の問い直し

様々な資質・能力が社会的要請として求められる一方で、すべてを中学校教育で意識して育むことは、何らかの弊害をもたらす。学校教育として、どのような資質・能力をどのように育むのかを問い直す必要がある。

上記2点について、本研究開発の成果と課題を踏まえて考察したい。これらのことが明らかにできれば、これからの学校教育で課題となりうることに対応可能となると考える。

³ 教員アンケート調査の記述にもあったが、新領域または自教科だけをみるのではなく、教育課程全体を見る目を教員自身もつことができるようになったことが、ねらいに即した授業への具現化につながると感じる。これは新学習指導要領に戸惑いを感じている教員にも通ずる部分であると考えられる。